反木淳君 通雄 君 作曲 作 歌

秋蕭々の 春静寂なる石狩のはるしづか 々の寮窓に倚り

北斗の啓光さしそえど 夕雲遠く友を呼ぶ

哀れ悲しき旅ならむ

暮る秋風に啼く虫か 北溟ゆく雁は名のみにして

はた又魂の語らひか 楡梢に喘ぐ郭公か

知るや無象の天の外に の波濤は荒くとも

> 白銀吼ゆる朝風も はくぎん ほ まきかぜ 十勝の峰に断雲怒ら とから、 みね く もいか の峰に断雲怒り

> > 花咲き散き

りて春

Ŧi.

遷りてここに三星霜 ゅっせいそう

燃ゆる理想に悶えつつ
もだりるである。 奇< し ただひたぶるに辿りゆく

長き生命の斗争にながいのちのたたかい

ああ孤独 自ぜん 何処に祓所を尋めゆいづこのでき の芸術変らねど の寂寥を かむ

誰に語らん入相 味はひ知れる人ならで 鐘鳴りひびく楡陵の上がぬなか うえ  $\ddot{o}$ 

き調の琴と聴き

残ったし たぎる情熱を篝火に 逝に 高唱はなんかな自治の歌 の杯を汲み交はかる し遊宴の宵の夢 Ũ

今逍遥 行手遙けき豊平 森の翠の色深くもりのみどりいろふか の原野に萠も がゆる

ல்

哀れ愛しき絢夢なれど 清流に泛ぶ綺花の影 我が生命こそ 真 なれ